

平成22年度

生駒狂言鑑賞会



音楽 琴 木村 正雄

【日時】 平成22年 6月12日(土) 午後2時開演 (午後1時30分開場)

【会場】 生駒市中央公民館 サンホール

【主催】 大阪樟蔭女子大学・生駒市教育委員会

入場無料

★お願い 著作権、肖像権にふれますので、主催者指定以外の写真撮影、テープの録音はかたくお断りします。
★車での来館はご遠慮ください。(申し込み不要 直接会場にお越しください。)★プログラム・出演者は予告なしに変更する場合があります。

【お問い合わせ先】 生駒市中央公民館 (電話0743-75-0101)

番組

狂言解説『狂言の登場人物』 大阪樟蔭女子大学客員教授 木村 要

狂言『文相撲』 大名 茂山千五郎

太郎冠者 茂山千三郎
新参者 網谷 正美

後見 柳本 勝海

ワークショップ

指導 木村 正雄

補助 神澤 和明

出 演 木村正雄門弟と生駒市内小学生のみなさん

狂言『膏薬煉』 都の膏薬煉 木村 正雄 鎌倉の膏薬煉 柳本 勝海

後見 神澤 和明
生駒市民二人

狂言解説

文相撲

ふ(ふみ)ずもう

「相撲物」「新参者」の一群の狂言の一つ。

各地で相撲が流行っているので、この大名も相撲取を抱えようと太郎冠者に新参者を抱えにやる。街道で待っていると都合よく相撲の得意な奉公願望者が通り、太郎冠者は抱えて帰る。

大名はすぐさま相撲が見たいのだが相手がおらないため、大名は自分で相撲を取る事にする。

ところが、立ち上がり様に新参者に目の前で手を打たれ目を回してしまう。そこで二度目は伯父から貰った相撲の手解きの書を読んで、握り拳で打ちたたいて勝つが、三度目は相撲の書に書かれている通りの順で負けてしまう。

腹癪せに太郎冠者を打ち負かして気炎を上げて去る。

狂言の大名は大きな名田の主人という意味で江戸時代の大名とは異なるが、それでも家来と風呂焚きとしかいないと言う設定が面白い。

その上、おおげさな物言いを好んで言う大名が「新参者」の狂言には多いが、大名らしさを保ちながらどこと無く滑稽を感じさせる演技は難しい。

同類の曲目に『鼻取相撲』『蚊相撲』がある。

膏薬煉

こうやくねり

都と鎌倉との膏薬煉が、互いにそれぞれの土地では名人と自慢をしているが、日本一を決めようと国を出て道中で出会う。

まず自慢初めに自分の膏薬の靈験を述べ合い、次いで膏薬の材料を自慢し合うが、結局、どちらの膏薬が良く吸うかを試すために吸い比べをする。

鎌倉方が走り去ろうとする名馬の生食を膏薬ですい止め、廐につないで「馬吸膏薬」と言う銘を鎌倉將軍から頂戴したと自慢をすると、都方も六波羅邸の造園の時、北山から大勢の人夫を動員して門の入口まで曳いて来た大石を、膏薬で吸い寄せ門内へ入れて庭に据えたと自慢をする。

薬種（材料）は大蔵流では、鎌倉方が、石地蔵の腸・木に生る蛤・蚯蚓の胴骨と言えば、都方は、空を走る泥龜・地を走る雷・雪の黒焼き（和泉流では、鎌倉方が、海に生える竹の子・蟹の牙の一尺八寸もあるもの・雷の睫毛、都方が、空を飛ぶ胴龜・榎に生った蛤・雪の黒焼き、茂山千五郎本では、鎌倉が、赤子の頬鬚・石地蔵の腸・海の底を走る白鳥・蚊の涙、都方は、六月土用の内に降る雪の黒焼き・幽靈の影法師・木に生る蛤・天狗の水鼻）と言う。

色々と有りえない物を考え出し、観客を楽しませるアドリブ的な草創期の狂言の台詞であったと思われる。

出演者紹介



茂山千五郎

茂山 千五郎（シゲヤマ・センゴロウ）

1945年（昭和20年）生、四世茂山千作の長男。1994年（平成6年）、十三世千五郎襲名。1950年（昭和25年）『以呂波』のシテで初舞台。1961年（昭和36年）『三番三』、1966年（昭和41年）『釣狐』を披く。1986年（昭和61年）京都市芸術新人賞、2004年（平成16年）京都府文化功労賞受賞。2008年（平成20年）文化庁芸術祭大賞受賞。茂山家の当主として、弟の七五三・千三郎・従兄弟とともに、狂言会で活躍している。日本能楽会会員。重要無形文化財総合指定保持者。



茂山千三郎

茂山 千三郎（シゲヤマ・センザブロウ）

1964年（昭和39年）生、四世茂山千作の三男。1967年（昭和42年）『業平餅』の子方で初舞台。1980年（昭和55年）『三番三』、1984年（昭和59年）『釣狐』、1999年（平成11年）京都府文化奨励賞、2003年（平成15年）京都市芸術新人賞受賞。2000年（平成12年）『花子』、2005年（平成17年）『狸腹鼓』を披く。ミュージカル・オペラの演出・出演など幅広く活躍する。日本能楽会会員。重要無形文化財総合指定保持者。



網谷 正美

網谷 正美（アミタニ・マサミ）

1947年（昭和22年）生、1965年（昭和40年）木村正雄に師事、24歳に茂山千五郎（現四世千作）に師事する。1965年（昭和40年）『癪痢』のアドで初舞台。1978年（昭和53年）『三番三』、1986年（昭和61年）『釣狐』、1995年（平成7年）『花子』を披く。1977年（昭和52年）大阪文化祭賞奨励賞。1984年（昭和59年）に松本薰、丸石やすしと「三笑会」を発足。2006年（平成18年）三笑会の活動が認められ京都府文化賞功労賞受賞。日本能楽会会員。重要無形文化財総合指定保持者。



木村 正雄

木村 正雄（キムラ・マサオ）

1929年（昭和4年）生、本名要、木村政一の長男。父および三世茂山千作に師事。1932年（昭和7年）『以呂波』のシテで初舞台。以後1969年（昭和44年）『花子』、1972年（昭和47年）『三番三』、1974年（昭和49年）『釣狐』、1994年（平成6年）『枕物狂』を披く。これまで同門会1958年～63年（昭和33年～38年）、七笑会1964年～69年（昭和39年～44年）、双の会1972年～81年（昭和47年～56年）、翔の会1982年～97年（昭和57年～平成9年）主宰。1981年（昭和56年）大阪文化祭賞奨励賞受賞。新作狂言『鬼の目にも涙』1973年（昭和48年）を筆頭に現在までに28作品を創作・初演する。著書に『新作絵入狂言記』『新作絵入狂言記(2)』カナメ企画社刊『狂言のデザイン図典』共著、東方出版刊。



柳本 勝海

柳本 勝海（ヤナギモト・カツミ）

1970年（昭和45年）生。1989年（平成元年）同志社大学入学と同時に木村正雄に師事。同年7月『口真似』のアドで初舞台。



神澤 和明

神澤 和明（カミサワ・カズアキ）

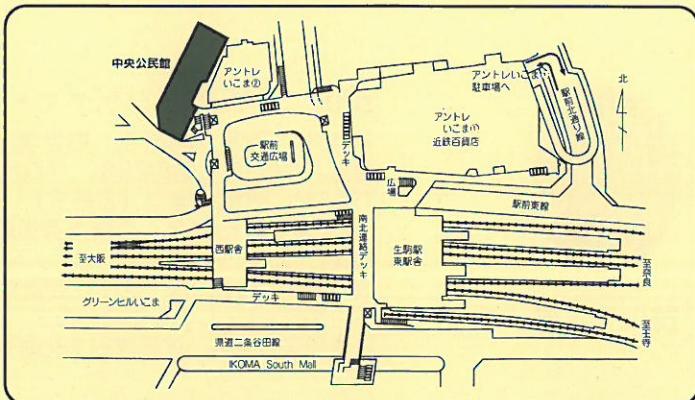
1971年（昭和46年）18歳で木村正雄の門下生となり、『萩大名』の太郎冠者で初舞台。京都大学入学後は、同大学狂言研究会を経て、現在に至る。現代演劇でも演出・劇評の分野で活動し、「文化庁芸術祭（関西）」等で審査員を務める。奈良工業高等専門学校教授・大阪芸術大学講師。シアターライフの運営委員も務める。

生駒狂言鑑賞会会場

生駒市中央公民館

TEL0743-75-0101

〒630-0245 生駒市北新町9-28



はばたけ、知性。



学校法人

樟蔭学園

大阪樟蔭女子大学／大学院 大阪樟蔭女子大学短期大学部
樟蔭高等学校 樟蔭中学校 大阪樟蔭女子大学附属幼稚園

大阪樟蔭女子大学

■ 小阪キャンパス 〒577-8550 東大阪市菱屋西 4-2-26

大学院人間科学研究科 人間栄養学専攻

学芸学部 国文学科 国際英語学科 健康栄養学科 被服学科
インテリアデザイン学科 ライフプランニング学科

■ 関屋キャンパス 〒639-0298 奈良県香芝市関屋 958

大学院人間科学研究科 臨床心理学専攻

心理学部 臨床心理学科 発達教育心理学科 ビジネス心理学科

児童学部 児童学科

大阪樟蔭女子大学短期大学部 キャリアデザイン学科

お知らせ

平成22年度 東西狂言会（開催予定）

人間国宝をはじめ我が国の狂言界を代表する出演者を予定しています。

共 催： 大阪樟蔭女子大学・(財)東大阪市施設利用サービス協会

後 援： 東大阪市・東大阪市教育委員会・東大阪商工会議所・東大阪菊水ライオンズクラブ

日 時： 平成22年11月29日（月） 午後6時～8時30分

会 場： 東大阪市立市民会館市民ホール

番 組： 解説 「座・狂言とは」 大阪樟蔭女子大学客員教授 木村 要

『呂蓮』 僧 野村 萬 男 野村万歳 妻 小笠原 匡 後見 泉慎也

『栗焼』 太郎冠者 茂山千作 主人 茂山千三郎 後見 松本 薫

『鈍太郎』 男 茂山千之丞 下京の女 茂山正邦 上京の女 茂山童司 後見 丸石やすし